

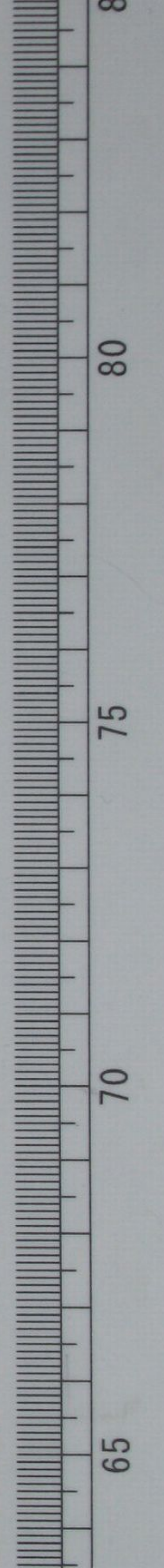
新譜子

晋子年

乾



中村俊定文庫
文庫 18
917
1



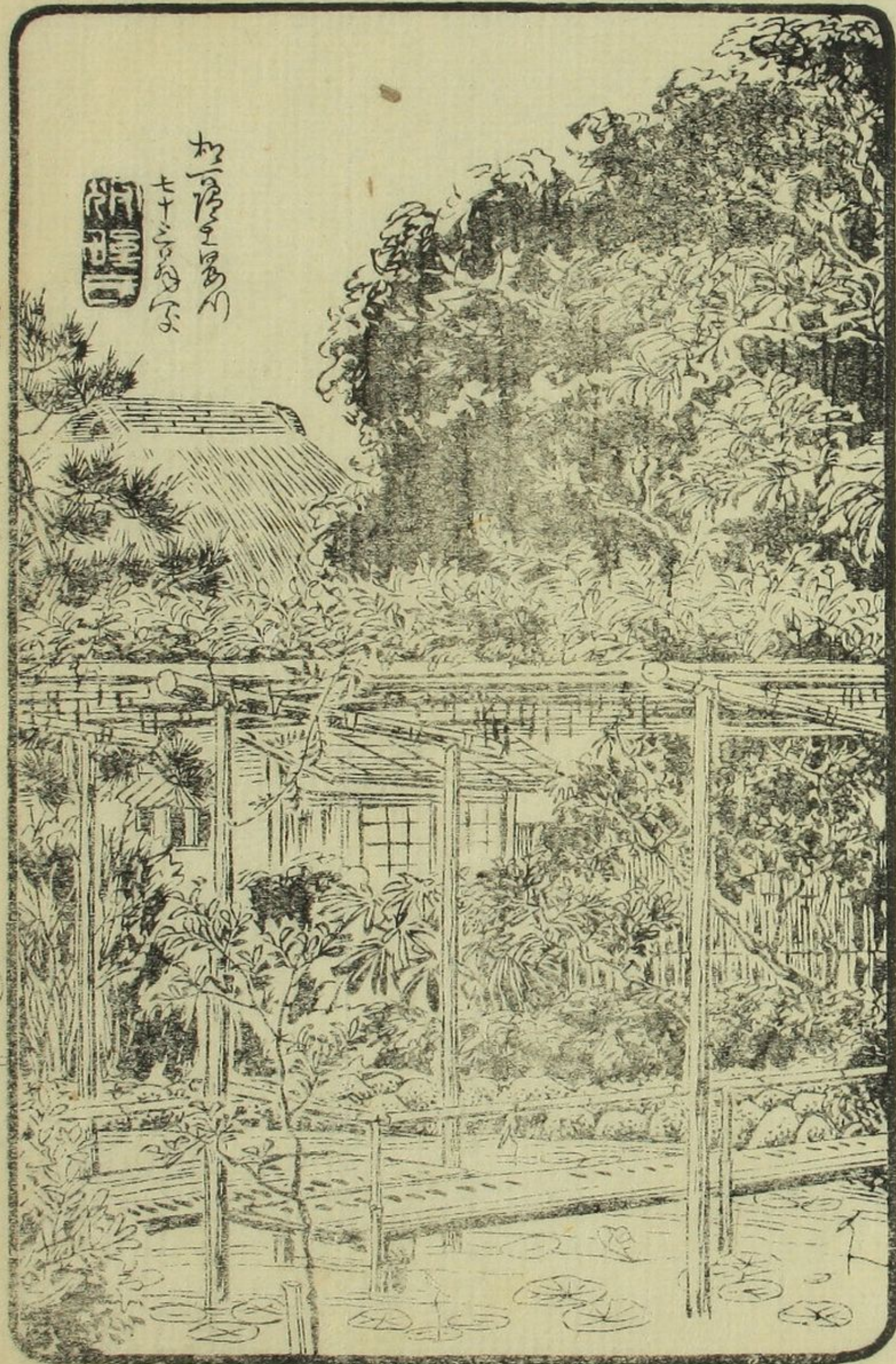
此書をけり集の趣ももろとぬるを
先弄りり遺稿ぬるもくしなをきまの
かみきこもくしぬるぬる我れは
しきまし摘ハ望雲而思のこも
とくもやあはさくあまは
とくもあはさくあまは
多の申子晋子翁り年一考と
五十句の粗釋も我れぬるを

且ねりくくの所はうく七
海嶺の董道とくしぬるぬる
けきくぬる何とホみく

ぬるぬる
何大笑し

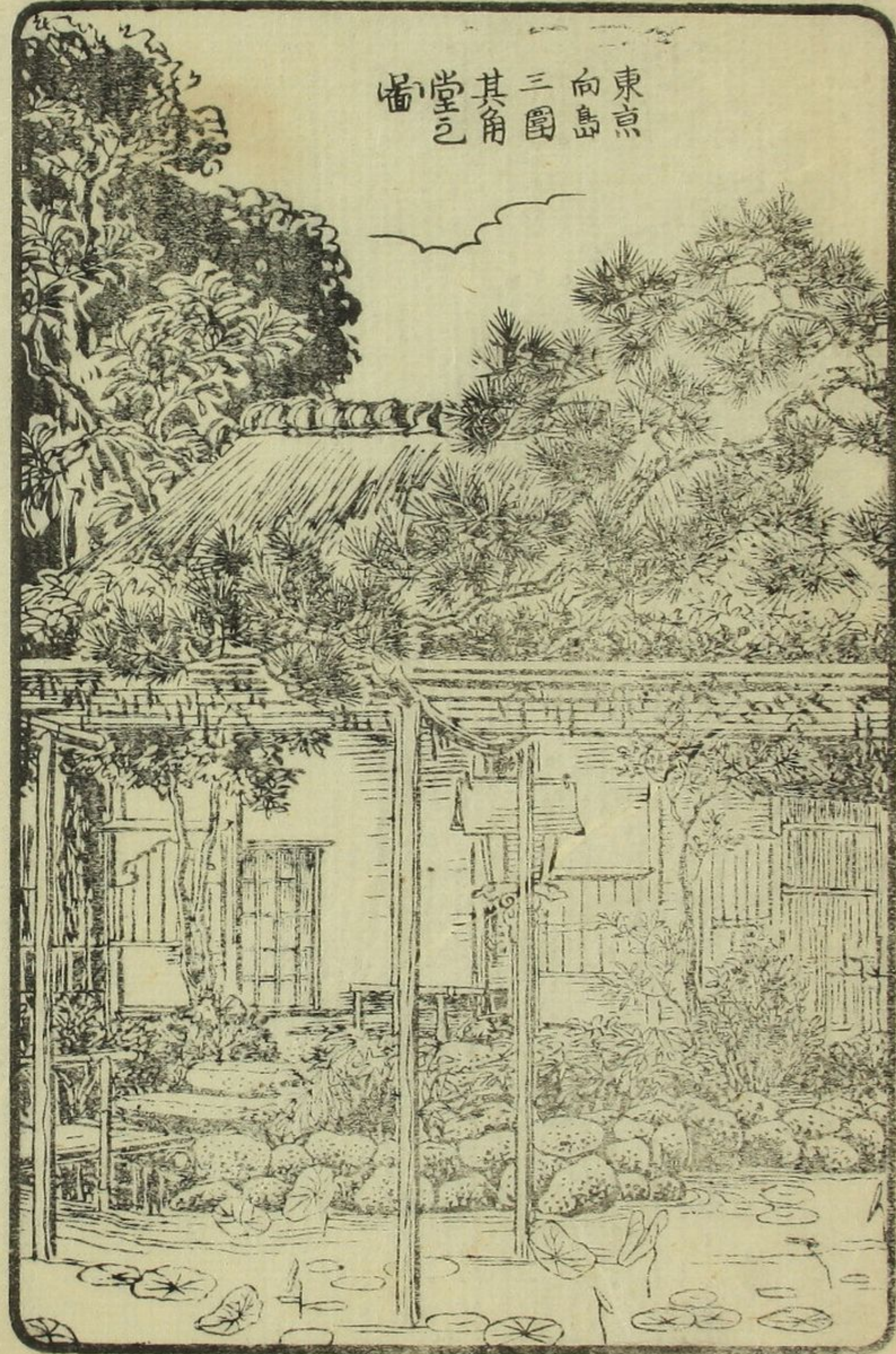
何活孝也仲し秋 寶晋斎の楨

楚の地
子の董道



如
 一
 陽
 之
 陽
 也
 七十
 七
 年
 丙
 午
 月
 廿
 二
 日
 畫
 堂
 之
 畫

累
 心
 同
 道
 高
 司



東
 京
 向
 島
 三
 園
 其
 角
 堂
 之
 畫

虫
 宮
 蓮
 赤

晉子
六正
螺窗
居士
肖像



男子律房の肖像



俳諧
み、な草上 晋子年考

老菴肝螺窗翁遺稿

其角堂永機編
小築菴春湖校

室晋初其角翁本姓竹中氏也累代江別屋田の農者なり
父八椽中東順号晋子元和八壬戌誕焉後东武堀江所に住
りて下野守の如く俸禄を得て医術もつて業を以
て和歌連歌をよみて亦俳諧も名有り由良正春の門を
出でて同列傳集の如くも椽代也順六十の如くも官を辞
してより十とせ阿多礼を以て号す三子あり長男也晋子の如也

其角堂遺稿

是を極くして一家の俳諧より不同三乙卯十五歳 肉淫
素は易經素印を寫又蒲生書の巻末に何れもの
のりくの書字有り同卯丙辰十六歳 國を草新三越の
講定より出る匠の名を依世とよみ儒ハ服部寛高を
學びて本年講述有り書ハ坊々木文山より後一家の
何れも画ハ英一傑より

何れも画名甚多しと云ふをわたり草菴日記より
くすす白兄才氣甚多しと云ふ者より名あり晋子の
画をよす 勢州松坂も并所 所和梅の画漢晋子甚多
双書トアリ

豫翁大巖和尚の詩を學びて今年易傳受有り

唱晋其角 易經上神下晋上九晋其角より
同五乙十七歳 施普九歌仙成り同六戊午十八歳 菟合
松尾五十句合化は田舎白合なり 同七乙未 秋洪水 同
八庚申九歳 次韵俳諧有り 是より信徳より七百五十韻あり
對 二百五十員也

兩集の年号より大乳仙の延宝八次韵大延宝九より
同様の成り

同九年同十六歳 九月改元 天和元となり 同二十壬辰 芝
金地院前より居を移して同二十三癸亥 三年河原の吟
醫の何れも歌洲生よりあり

とるその世

信濃ふむる子と何りりあり存

と書て

病床をくぬりりるなり

子と娘ととあつてこころなきあり

呪

七十有餘の老送とつゝ何の樂をるゝのまじやと替り美の
もくむる一所をよおす

我病るる子草のかり駿のか

つらと七十二を限りて八月十八日の晩寝 月九の

二中後葬上行奇

と書

癸酉八月十九日昼亡父葬送の場より
崩心の悲涙懐きて四生の記あをしる

お吟

晋子

一 娘や野とはのねのまき眼うな

とそふ母の片袖のまき衣

世の破節あつてつらやうありん

海にまゝしるるさめ乃酒

海をくぬりぬ氣がう海山と

孔者の語はくく雪汁

唯信書
世に
けつ
けつ
い
ま

采石のまじりたるはゆき詰り
 たるもちの畑供りり
 采世の標の立の雑司谷
 茶碗のよりの清のなま
 山家への遊行の師をなれ
 今産の所は樹のま
 破の声 端まき 古戦場
 石地、雪をぬる
 草履の意をくはる。谷の
 點の向を此井園にして置

日ほりある。那裏の人の
 高の所を、家の編は
 七つ、枝をくはる。こ
 仕加の意、我をくはる
 花の存る日、水はす
 海を力く、雪をくはる
 目く、死をくはる。こ
 此後、是の所を、思
 世をくはる。こ

立して傍房多のわち、小築垣
 河の邊にさし井、ある。竊
 物まじきとのお所乃男まじ
 おまじき。平仲り教
 ありさうと申さる。各ハ明はあ
 四度との仕着を恨してやま
 鄙人を罵してはといらま
 濟のこゝらハみ。まし醉
 風呂帯しりま。し月を結
 紋のつた。いつとの。我

芋の根、ちちまた地のをさねく
 殺生石のりある。む。面
 菊の園をこゝら。我はし
 旅を採らぬ。ぬ。麦飯を買
 何さう。き。市の人。や。白の上
 こゝを。僧都の。足す。の。濱
 新け。て。鯨の。干。あ。る。を。登。し
 牛の。ぼ。ろ。我。さ。く。又。存
 所。は。二。所。格。配。の。藪。の色
 ち。ら。着。せ。玉。解。す。の。白

去るくつまゆりも一浩く出く越年於京白兄等三老
成回八之次三十五歳去来り眾よりまじり枯屋を二更
翁理馬記格力成二更のこめゆ内出及浪戸の成

け市四國八口らぬまじり言はくまじり
さし白下ゆけはくまじり

同存をの句く

岡成り二重訓し京り祝

十月帰京都

熱田浮舟の浦とよきこころの誓を

雪の肌を世に下らんおの月

音子

子方の羽りのる砂原

碧白

城壁のをり大根を打りし

露川

冷海のをは梅枝のすも

湘水

奉公のこころは満ち二枚を

花次

まじりあゆみ承力一瘤

梅人

村沼の鯉成おしく走るし

素

あふりあけのあふり

野出

十九の年の吹雪

虫達狂倡吟

冬草花菴の雲所

御子着しほの御心何れ大井川

回年 併諧其除をばり 草履はは来す

表ハ地のぬし

解ハ地のぬし

表ハ地のぬし

滑向をぬしの

之ぬしを

昔の人の

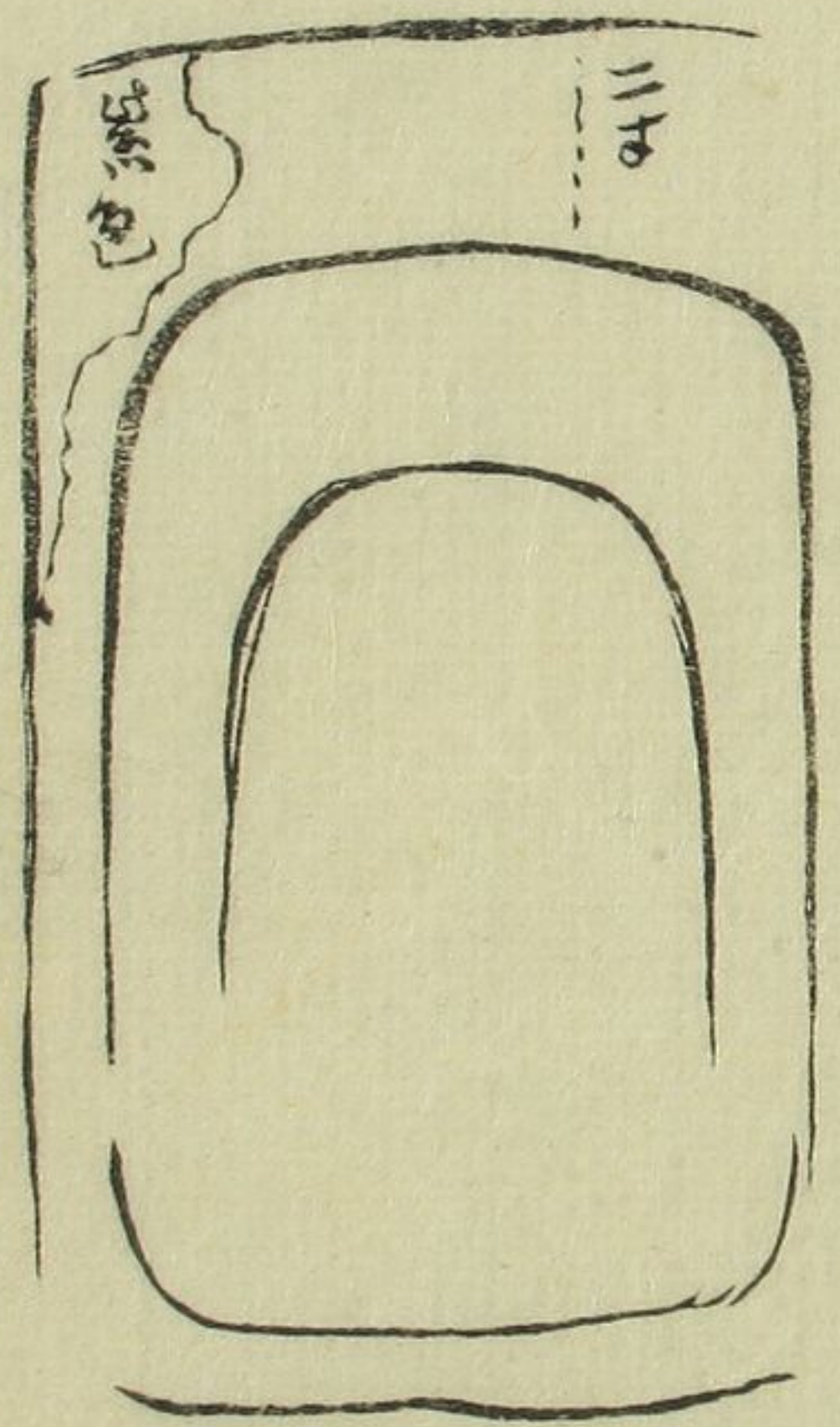
是ニとて紙一田廣の

種ひとりの賣とぬを

是ニとて紙一田廣の... 月雪の... 龍尾石

龍尾石

出 ちす
巾 三三
厚 八ト



龍尾石の
画工
抱二所藏

龍尾石の

裏面

寶

文字大キリの番

走より号 宝晋社

至日 瑞

元禄九丙子十月深川長慶存一翁の墓を移入を

時節もいふころ舟政を墓とあり

専吟沾徳境より四吃の雲仙何り 同丁丁五三十七歳

甲子辰をさしふる各さちとふ

祝 壽 育

とめくちの皮と膝の緒つとら

くらし若たニを撰て綿繡段段 終の央上貞

げり浪花の旅舎つかしと翁の何のありとを

書写何りともて庵をけふ十二月帰京にゆり

寅三十八歳六月廿日高港より居を移す是田早

五丁目海側の住居し有竹居文合庵の号あり

竹三草をいふつげしとてか

竹の際さくらと寝る時より

煎菟ひ白く腸をし

伯〜〜の家のありしと

解〜〜

ぬぼ知の〜〜

同十一年十二月十日草庵祝部の終るか、貞享甲子
の冬上直也〜〜日記〜〜
袋〜〜
池魚の災〜〜
浮〜〜
同十二年卯三十九歳

〜〜

おれ燈の次近郡の居を訪して一移〜玉子松野人々

雪のむ水十とよむ

〜〜

同十三歳辰四十歳萱坊甲子

藤原堂の甫〜尊庵割立ありし終る早〜善哉庵

梅〜〜

同十四歳巳四十一歳二月魚尾琴三里〜
三上吟と歌すげ歌仙
白江八景と比す

〜〜

同十五歳午四十二歳三月魚尾琴三里〜

十二月十四日都文少卿を〜俳諧一堅

都文公より八去屋産し二千石を以て中庭回向院表
 吉良のときよりやいさぬり
 山風雪松ゆき晋子ししひ夜海原音三石の生おへ
 赤穂の浪士押よも古主の遺恨を果さんとせよ
 葉のしして大なる源音びりしを述はる葉ゆきハ其
 章客より生涯の名跡對面りんとり外よと
 ちまハ既く吉良家(ちのら入)とせ
 我雪をかきつハ師し一笠り上
 月と雪のりハ命の控とらら
 極月二日山羽文鱗一の文通せし海原りし一回十
 登来四丁三をの末可子をまゝる名みり

雪をかきつるの句

悠帝し卯卯ハ暇をきりり
 同年十月十四日江戸大地震
 一辰風流火とつまつて
 妹ら多ハ薑とけけく解の書
 室永元甲申四十三日改元とて歌歌榊子と名貯ナル
 丁亥の夜雪のなを思ひくハハ上本を
 同二己酉四十五歳
 夏の如く心解しして草庵の蔵とて年より
 病より三年 病中別業を好しし
 栲瓶の串海嵐とるまゆ白の友

嗚呼生おの口を閉てて我死ハ悲極柳をたて酒の
むらぬの夜の雨のあをさししふ思儀なるとぬその時
阿る誠ヲ知死期の大禪機とふりし時三月二
亡歎ハ二巾樓上行をよ細の東山居士の墓に双ふ

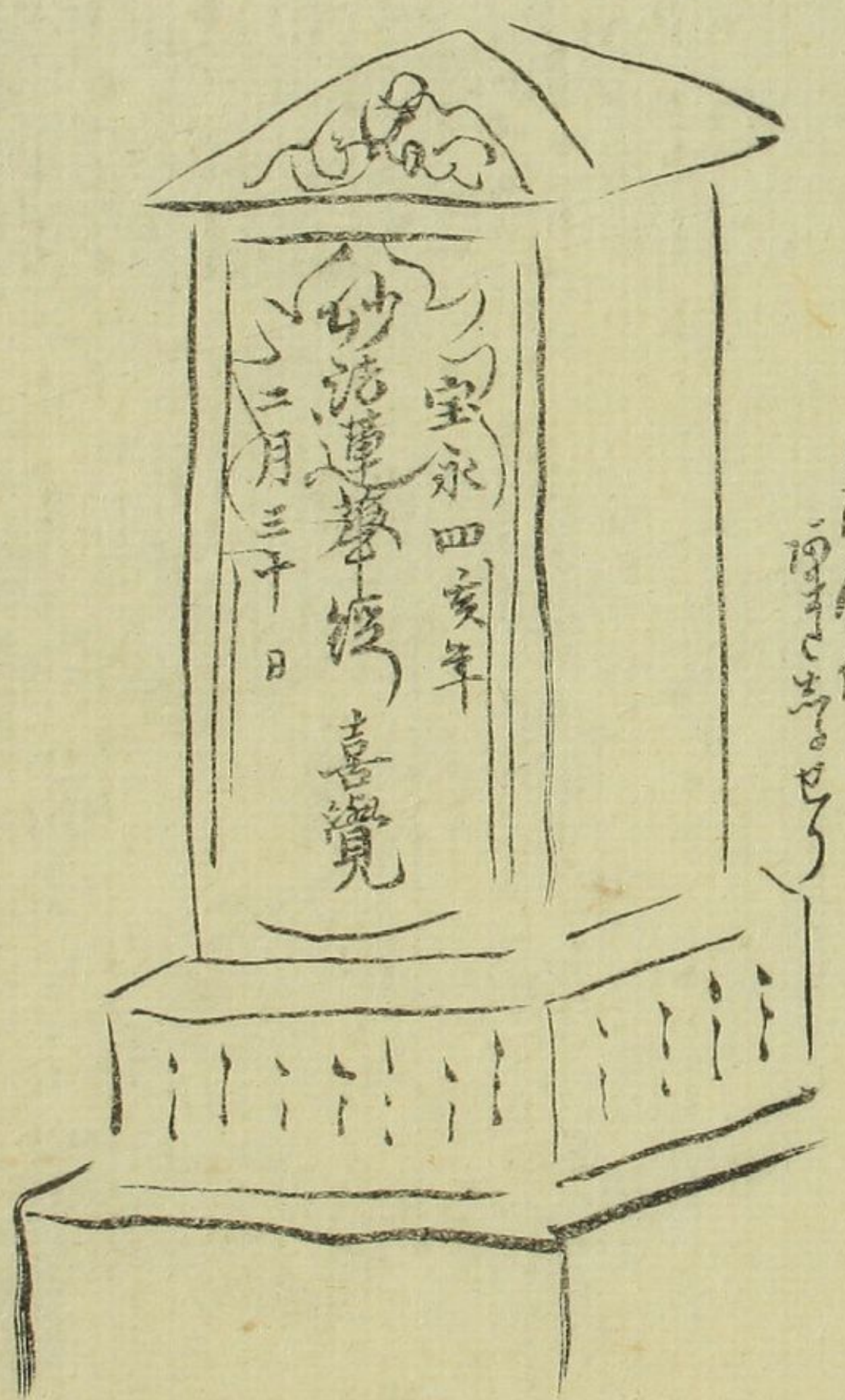
今東都小田原町ヲ宝井吉五郎とらつ。高家河
是晋子の血脉也

西居士の墓壙の如し

墓壙の宝井と申す
喜泉の井と云ふ

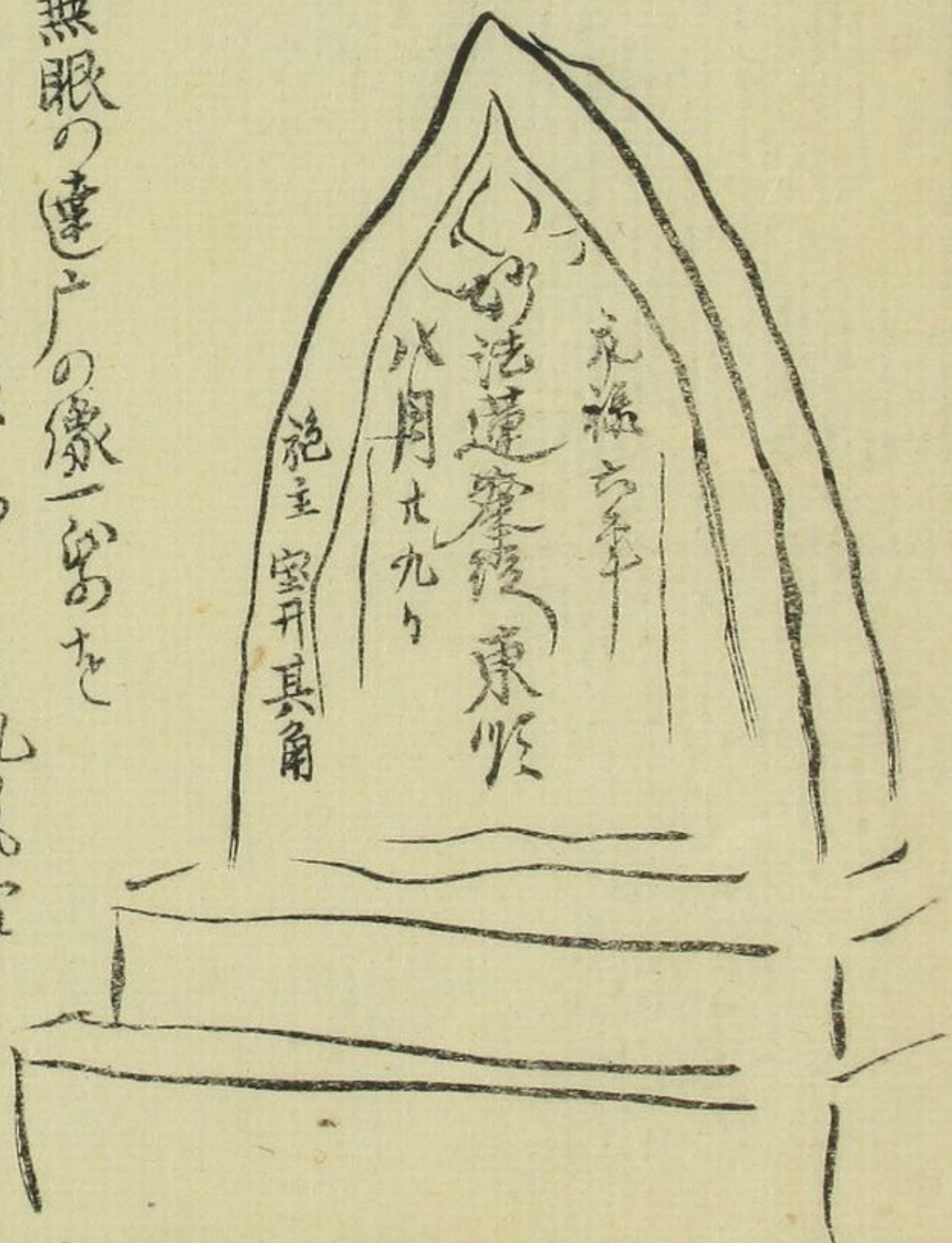
墓石再建ハ五十年忌の石川度ハ寄附し

石川の傳者
ハ喜泉の井と云ふ



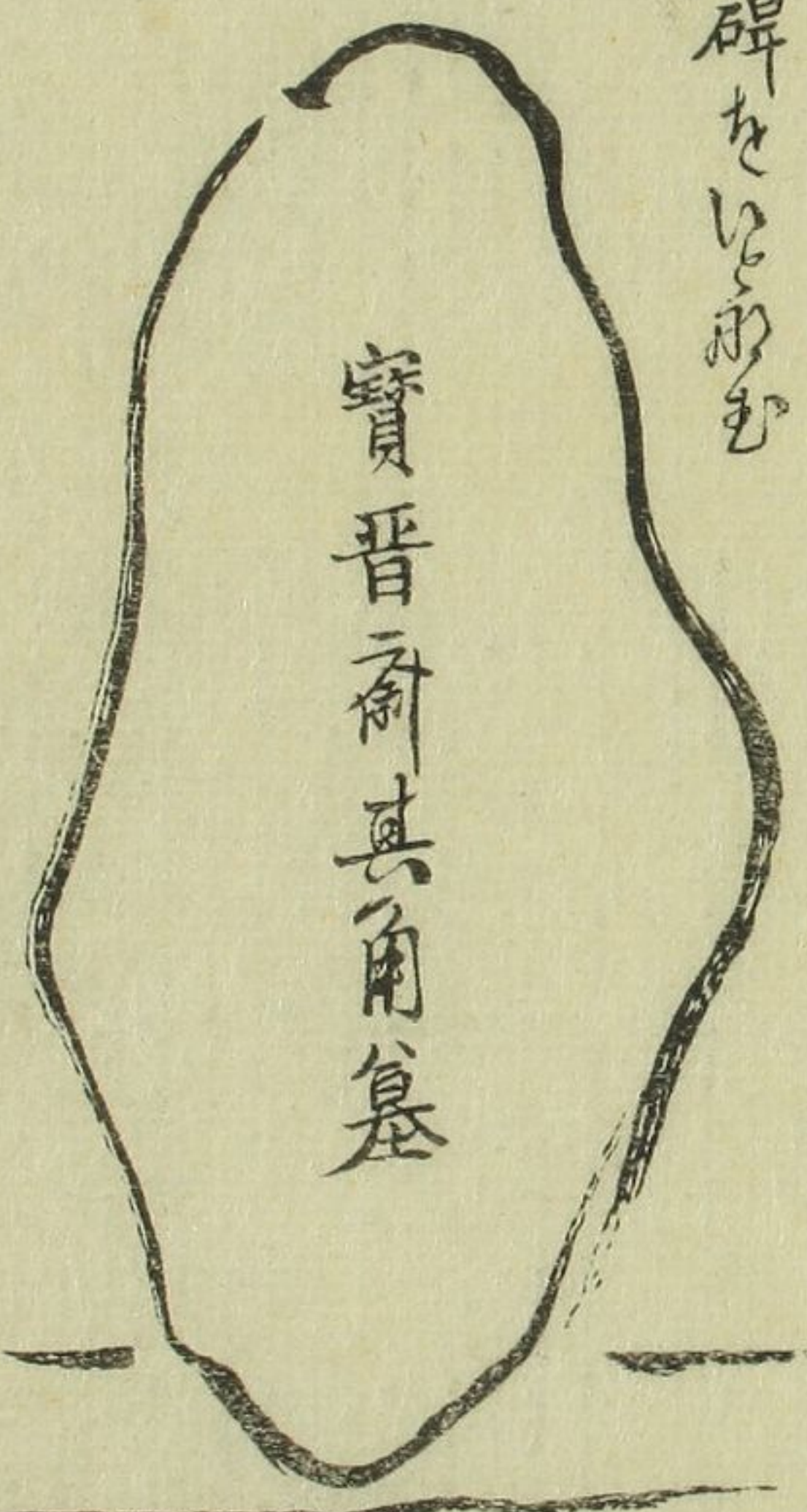
墓所全圖ハ江戸名所番繪
カキ

晋子病中、無眠の連片の像一箇を
書けり、廓然不動の因縁、如と青流嵐雪
松風、海をこゝの知友、心へおきて、深川を長き



永福六年
法蓮堂後、東照
八月十九日
池主、室丹其角

芭蕉翁の場、膝しなつり、土履頭を築き、此佳城の下、
細く墓碑をいとおむ



寶晋斎其角墓

裏面

室永丁亥年二月三十日 知友門人建 伏文山書

彼歌、母子を風うしよ、夢の曉、秋の氣を感、九句、何に

意漢禪師九變の氷雅の必まのりんりの氷作の
天の一句を今昔部のおりこおつたやうと云ふ

その昔東古のみてらうりふ量か佛母準提尊を
授よとてれし其角堂し一安置とてゆりふる昔部のおり
産後強めりる八準提靈驗記のちくくを神法の吟と
今教曆を彈し草堂の本地佛となりて誠なり
万劫の佛果とていしん甲禪の天とていしむ

終焉の歌仙つりり九句ましやめを今茲
先考の螺窗居士也善のついで居き附白り

造草を抄ひとてし昔部のおりり續る所を
一更とていれし昔部居士と八九一五十年の
陽るぬす六句のありし何とやうとておれし堂とて
韻の齟齬とてりり却て所推の罪人とて
心とていれし也

七世孫 晋永機

和歌集

おもとをば 氣をさす 夜盤

扇の芝の画をすこし 草

買の雛子一やうく 旅の

住たき ごとく 居ても 言ぬ 返笛

河竹の情を水より 忍びうせ

和歌集 揚枝をゆしし 持たす ぬ

くさば 縁もむ ぬらる 涼さよ

元歌三 旅の 宿の 魚の

孝行を 玄鳥 祝啼の 伴も ぬ

元歌四

膝も しく 伊関の 聲

角 角 角 角 角 角 角 角

此軍 郊の 海を 結を のつと

和歌集 萱の 刈り かく 碇 総

舟の 舟 琵琶の 面を ぬら

白足 舟の 行る 船の しの 秋

高 霜の 長の 田舎の 舟 田川

花つと 子の 白く 母の 舟 橋

鳥帽子 三石 舟の 舟 世

河原 舟を すけ 舟の 舟 世

舟の 舟 舟の 舟 世

汗の 舟の 舟の 舟の 日

角 角 角 角 角 角 角 角 角 角

晋子居函 編輯目錄

田舎句合

系ノ栗

蠹集

新山家

瀆水梨

花つこ

以を昔

雅淡集

萩の海

栞尾花

句兄和

若原合

裏の島

錦繡伝

三上吟

焦庵草

ふらふら

新三百頁

新三百頁

亦

文蓮葉

綴糸

皮籠摺

夢披三百頁

没存摺り

類摺子

丑九集

續丑九集

借佛

升々亭上紙

